



三冊續

ツセナ  
三冊續

伊州  
上野  
澤長齋  
林書

15  
510  
1





門 4 曾 6  
號 510  
卷 1-3



二川隨筆序

余讀花洛山川素石子所著二川隨  
筆其學也博其文也贍其式也極  
其文也充其辨也解其以處之  
近世の事或人物法物の根元森羅  
万象の冥思事實故實の類あり  
竊に隨筆を閲するに細川宗孝子  
といふ人あり其後廣見文高而



以<sup>ラ</sup>返業鳴<sup>ラ</sup>帝都一日石子遊細川  
宗春子記誦以書籍一部以和漢  
の具理忠孝性異感応を記述する  
書りて然る文藻いよと全篇あり  
あ。石子祭と別り關たを補ひ  
二卷とあり。石子。近世見聞の説を  
加へ附異し一帙名之ニ川臨筆  
一度巻を披け、性異再々を野  
武勇の人を悦びしむや賜て



長夜の茶話とあり編りての忠孝の  
禁戒とありは支惟、聖人の事と悦び  
道と教にまいて性力礼神と語ら  
るといふもあ止りて故る時に述著  
列を多せり是を以易小然の理と  
致すといふ或杖有傳小公子勸生  
七化物太子申生の幽霊を記し  
事の実ありや本知も古今著例集  
今昔物語の類より寓言を以て











糸洲の文より一編の夕雪の行は  
楳々たる茶や炭文のけり  
きん雑談の老の志いとす  
柳原新法露のいづ敷  
物語や少の事よ想ふよまきり  
いよまのちよふねて書記せよ  
しつら小窓の文机よりて筆を  
思ひゆる傳よ書しほよはねて三卷  
及ひぬ彼吉田の法所よりつり

よしり事とは書し  
一部は老在の道と申す  
後の世の教とある事と記せしは  
今の世まんとて無き  
は一部に教とて  
つら筆拙なれん文の  
よの業となく  
まが老きる人の語り  
しつら



とよむ書綴早

干時享保十乙巳歲三月上旬花洛の

朱越軒の禿筆とて護るに作と  
序し傳。

細川宗春 季明

二川隨筆叙

獨閑窓比々啻し机よりて寤の  
一篇の書紙著る文之武之詩之類  
その感もつる今古の事跡偽侶の  
好状故實末由妖恠莫可失載く  
捨る事ありし書の盡緒は洛下の今  
細川宗春甫字に季明とよむの序  
と足清和帝とよむ源姓足利の



兼流りて京都公方家の管領  
細川京兆の正嫡の代に成名と日域  
輝一國家の政事と掌握し  
諸國の列侯の冠しり物といふ  
世移り事ありて今武業と捨医師  
以て皇朝の鳴る海世の諸藩にせん  
物多し春子間暇の茶話と長来の熟談  
物にてまじりし物と採りて書記と  
以て一篇の書とあり物といふも文

次全くは是則医業死を活し  
危きを救ひ病を癒して暇多の弊也  
予幸と友と好むを以て書と  
讀むて以て其詞の繁茂を以て送嶽  
也と補ひ段ありて且間今案を加へ  
後子余見少す。而の物と附翼し  
一書とあり也。正史雜記和漢と  
世に世を記しとありて後氏百家の書  
牛の汗し栞。充つ是他も既往の



事跡を録して後昆の戒と爲し今余の  
撰述する所も尚世後來の鑑  
傳んと爲るべし然れどもこれに  
他の  
のし泄さるるに書笥の内は朽  
朽可れども  
只宗書甫の筆記する處は  
眼よ及ぼす其耳よ過る所の事  
美  
之の記し真の志失ふべし  
是裏老耄のしりし  
心ありりしに依りて文辭  
をかき

席を分るる詞ハ鄙陋多し  
筆を垂るるをけりし一帙書  
をぬく  
冠すに爾

維時享保己巳年杵浪穀雨の日

杵浪子

山川素石信意







より又六里去て志香山村と云ふ所あり  
は所の百姓より刑部他と云ふ者あり或時  
刑部他妻より向ひ衆前油のりしりしに  
今日ハ調へんと思ひしにちよはくと申すれ  
こゝ今存するんづと他と申すは焼火  
つぎれに若せんと云ふ女房少てと云ふや  
油のちりやと申す人々と云ふ陶を乞ひし  
かゝりやぬれに内より油のちり事土器の  
今月斗一と云ふは是れ事一足りぬ

次の如し刑部他今日も又お日ひぬと  
油を調りし後悔さよとて酒を掃き  
在今の事なれにさ道又六所を向せり  
されに調事一対をんす時女房又かの  
陶や元心しりやと云ふ事一はれ共  
と云ふ傾てみしりハ又土器の八分月  
と云ふぬまより一は事一と云ふ  
思ひしにちよはくと申すは焼火  
事一は是れ事一毎夜油乞ひする







見ざるにありて 並河一郎といひし人の  
出たりし由りたるは 越の道に武内時  
とよ峰ありし時を 井の内かといひし人里を  
け里の百姓食ひのありし十六歳よりなる娘と  
十歳よりなる男子ありしは 父或時疫痢を類  
いけりし 鯉を喰ひたりしと云ふ娘をてきと  
衆人とすれりしと云ふ 貧乏人の子に似たりし  
娘をてきと云ふ 一と云ふ人よりれりて  
く高入たりし 物よりなる 船前なる川を

汲よりていふに 鯉水桶のちりり  
娘をてきと云ふ 父はあそと悦ひ 死ゆりて  
父よりいふに 父悦ひて 食ひたりし 疫痢  
口よりいふに 程よく 中腹より及つて 夫より  
いふ娘ありて 汲よりて 毎に 鯉桶の中より  
いふ事ありし 上まのえより 疫痢死事ありし  
け村の男女 疫病より けん 死生の事ありし  
との事ありし けいより けい 希代の事ありし  
彼娘よりいふに けいより けい 希代の事ありし  
平念



せう尤ゆききぬりしむしそ孝人の海を  
天の感意に記せりなる事なきや  
一貞享年中の頃来りてけりしゆとん  
鴨立河をせりしよんあきなり喜れされ  
りし西行法師の詠歌抄口すみて大磯の  
町をたれり世町斗り入るた言さばあり  
そ河の廣りまゝ一石おもなれし廣り  
而二石條りもなぬく是ゆ河の末にぬく  
流りて道階より世町斗り澤に付て入る

おさしけり竹の細丸り内へ入  
るに河より向ふゆ橋を渡せり橋を渡  
りて妙路りて花石を面白く見たり  
河の上掛他ははる田りそ口は二重波の  
下をえそり田に内へ入る見えし二重波の  
下は鴨立河をり額りえり人住まし  
るなりてしりしりらにぬ先り  
りしりしりの流りしりしりしりしり  
るりしりしりしりしりしりしりしり



思ひ又楊を液し仰りて毫下口より下り  
けり中條の男蔭を刻りて長竹のま  
と筒にまきりいれられしを復し任せ  
候めすれめりける内く入る小童一人  
自在に登りけり楊を焼て折りしより  
楊をわけしりしと尋ねられぬと云ふ  
是くともおのゝとていし藤人あるかゆりし  
くといふ近きれり嵐をよむを先て八十條の  
老僧書と開て見處より向ひ折りて是く

めんきしよりいりし何とて藤人の尋ねり  
たりしよれは下り若きり下りて付れ一尺  
杜ふんと存沃にきりし又付れん唐室の  
おと面白くも怪多れりぞ楊を液し  
顔のりりし下り葉内せりし  
者よりしりし下り又もせりし  
物浦山姿も怪多しりし  
かの法師のりし世に逐はれりし  
下り葉をゆりて友りし  
下年斗は



此の小田原へ程ちりきれ彼地の美を  
ぬむ人こそ友とて此れこそ慰  
めなり今も年老長く人よもせし  
掃除ぶらりゆせし庭を荒んし作り  
掛化あるの園あり作りて見たり  
まらせ小童の案内せし園の中を見  
二重庭月山とてまらり程なり  
二重庭の額の色下より後降子を  
見てせりしにぞまらりて園へ入

見えたり立切して終くまらり物語せし  
まのふれもりし成田左馬介殿へ仕  
りしにまらりせと捨てし境界とはなりぬ  
せりし一里計のまらり又智の如來のまらり  
造りしに長りしは水の風流を面白く  
思ひ又まらりて庭を造りし四方の景を  
見たりとて水の方とてまらりし櫛形の窓を  
見たりとて所程向ふは旅人の往来より  
とてまらりしにの障子をたれり



大磯の濱こゆるぎの故海道の風景なり  
くこゆ四季のうららるるまのつけりて  
葉を折るふねを海よりうつされしを  
閑居の友さうり侍りされりしは  
他任居なれし稀人よ何にんともてま  
振りしを小童よむひ美や旅人よ  
まのせよとくこ棚より東と美碗や  
さうてりの櫻さうり自在に美紙  
まのまの古代の御侍さうりなれり

いと面白くねし美やのこ物語す  
まのよとせはやく飛鳥井大物言敷  
いふもえし山録さうりしまのりや  
一袖をさうり

雅章

孤坐の頃鴨三河まのり  
暮れはし秋を待てるまのり鴨三河のむし  
とほり

大磯上一宿し侍りし今もりし物語は  
侍れり小田あく若物狂者もをり







幸ふなり一前より名に寄るおうし  
幸もあつらひはあつらひの事といはれり世も  
もるあつらひはあつらひの事といはれり世も  
あつらひにあつらひの事といはれり世も  
あつらひにあつらひの事といはれり世も  
あつらひにあつらひの事といはれり世も

一 古老の人の物語に今世の諸器の類  
振くつら昔より皆あつた振り  
思ふもなほつらつら焼くつら物に  
つらつら今も如く振つら中つら物に

つらつら近き幸も古に皆路地は焼く  
如く底板の土は焼くを垂たる物に  
中つら物に小堀遠から丸は焼くを  
あつらひしつら事起る南つら中つら  
物に事にはつら短繁に利休時代より  
あつらひしつらつらつらつらつらつら  
これ燭臺は土器のせつら古代の物に  
あつらひしつら

一 古老の物語に今世の茶の湯に



一 風流多事と他出し 申言といふに  
是ハ利休他あり是ハ利休より御りさ  
し事多し 大かゝり後人の他あり是  
且利義政公東より於て四世世安の敷書  
屋と他し ぬらん屋子の茶の湯と御り  
らるゝ 事起り 種々の茶器を朱  
より 珠光紹鴎まゝに皆屋子風呂の茶湯  
より 炒り事と 呼ばり 利休御り  
炒り事と仕出さる 因り利休他え

一 泉州堀浄土古れ 椽側と之を安  
屏風少くといひ茶の湯をせしより  
初て今の因り 去より 因り新  
造り 行り 敷書屋に椽を  
別子と書物 申さる 後子  
出来り 利休時代 申さる あり  
ゆく 猿皮にて 古田殿の正重勝  
中々 あり 仕出さる 因り  
任居種々の事ハ 古田殿の他多し



中柱、利休の子の道庵にて仕せしむ  
父の利休を以て是に吾類の物語なりけり  
此は仕せしむといふ後世の人用きありき  
なりし一とてやえ崩れて利休の園の  
中柱と云ふなり

一 炉ハ利休より初まり丸き碁のころこ  
板を切介しハ珠光紹鴎の時代よりし  
ありし今ハ碁の灰と碁とをけり丸き  
形よりハ碁のころこ丸き形のし

小説ありいまこゝに實をき

一 靈山の長嘯子の短歌の歌をみ

をいじりやえ井のころこハ世の世の  
形照せしむ

伴繁の歌ハは歌あり

一 寛文の頃ハ古卷の人ハ物語ハ之際草の  
海より事ハをさしむし南蠻人亦銀  
本朝ハ吞らるる時ハ小幡燭江  
とてそのみこし去りし日本人之初也



小瓶燭をたくのみよる人あり然に燭州  
るころく天下よらるるん長きものなり  
ま前よりこせ瘡とよよものも有りしに燭州を  
吞入りはこつていふこと云々して世に  
ひらまりしに然共高代のおとら燭州の  
道具ハリハサセるると細き糸の  
みしとこらきう尾く火を程に切書書の  
筆の油程あり老やま横に付け吞し  
けりまきも波持する人ハ稀なり下

なとハ本に燭州の事と云くとの  
口は紙をまき火を付く吞と何なり  
中万石程の石ありし大名の燭州吞  
と云れんもの近習の小姓を呼んで侍者に  
小姓行ふといつもの付まる火の火を入  
後ハ小石や壺又行ふハ唐草の  
二尺四方程のものを四つ折り持来る人の  
前ハ置草の末ハ小瓶燭と燭州有  
かの草の上ハ火入を置燭州といふはし



出の吞めい後石光灰を腐したの  
草やとよのさくふりて備ひく今吞と  
のやあつハ交交とさくの如し大若とに  
ちくをあれハ況下こよ於るお今おかく  
たたこ盆おとてハつん大敵院様ハ代々  
備州ハ世の流くありん可くハ傍止  
及び江戸所くハ何付煙管がく  
り成日本橋の傍ハ馬と強ひ  
江戸ハ煙管と集りしハ縣ノ友

事なりしハ江戸ハ城中評定所  
煙草盆の類ハ今も到りてありしかくの  
よくつぎハ法度にてハ兎角ハ煙料の  
病ひ止むと信む

- 一 或人のつむじりの書よハ内他ハの太刀  
とけくとりハ鹿の皮のつらぎやかけるや  
つむじ字ハ惣物他と出と有
- 一 はさみ箱とつむじりハ古ハ舞りるを大岡  
秀吉公請津家ハ一我と交せし人



為築家より進段の時丹州龜岡城を  
小野木造殿介のて校符を製此の時より  
素拙より秀吉公築田修理亮勝家佐  
久間玄馬盛政等と江州志津ヶ嶽合戦  
の時秀吉公兵濃表より一騎にけり  
馳突りし志津ヶ嶽の東岩の傍馬場  
とよ下りて狭き腰を担けしは  
休むりし時書よりしりし  
築田合戦の天正十一年築家の西陣を

天正十一年より六年以後は事あり  
先後お違せりし書を三紙考へし  
より前ハ校符といひて板二枚を合し  
かけし持よりし老人の物語より校符の  
より甲陽軍鑑よりし  
一 下野田守都宮孫三郎ハ世に守於宮十八万石  
を領して関東にても豪族ありしは築田の  
関白道兼公の玄孫守都宮孫三郎ハ伴崎守  
源頼義ハ幡を印義家ハ志切なるゆゑ



宇都宮座主職よりなる子代八田権  
以宗綱より子宇都宮左馬三郎頼徳  
謙介の右大将頼朝公に仕了しより此方  
世に威名を関左より子孫より宇都宮の  
二男の節より多賀といひて三万石を領し  
世に宇都宮の無下より子孫に宇都宮の  
家督を継ぐ多賀の惣領より世に継ぐ  
多賀の名跡ありけり宇都宮の二男は  
世に世にお績ありて慶長十二年十二月

廿三日宇都宮下野守田徳平去せられ  
家を継ぐ男子男子の時、津波川  
より多賀といふ家老より正安名跡より家老と  
お人内徳正より後継正長政の三男を  
養子にけり宇都宮の家督より人にお  
斗より依之正安より養子ありのお徳正  
清留して存けり多賀屋はのり  
より少太より思ひいふより早速討ちの  
者より揚上よりおくとお人の正安より愛



宮の跡に居るにみふ心切殺しぬ  
多賀殿に神田川文を遣ふに  
家中の老も多賀とすつて持向  
えより手たつて宮の長居て一万余  
と領しを交構へぬりも城七二重堀  
にんて要害のくくしに居るしりり  
税徴事つて既取入の出入の門に  
開てつり討ひの老れ天のつと  
皆と甲冑と書し夜ははつけ中門

まゝやんといへる夜も明ぬ  
頃中門の妻人其門を叩きし  
大勢押すにるそよ急ぎ門  
関人すれども外より押入る内  
妻人その武士と互に力を出  
点おととみ合し小聖苑人と  
いふもの細りし明も外より  
切殺しは勢ひし氣をたて  
也又玄関前より押入る玄関の戸を











け度監物志やかん一城中之振り振く  
りてあり強秋酒宴も及ひけり道中少  
共夕とて紙子の赤くぬの振子小袖  
ニ可ふ一と監物を収ひ取りふすの  
痛仰の振子十と一と快氣の有り  
と存しとくいりにりて動氣やゆ  
四月見の付しといささく冥途の  
仕らし又動氣の救免もなき  
とて酒人の身の重なる死に  
と

いそぐの口をさす次あり大形に今  
以賑ふよんとて益の上  
任に都もつまの果て松崎小治  
と

と今振の小袖やうとて酒宴閑に及り  
益取らるるも程々漸江に上り  
越や中上しり六列の動氣の免や  
四月見の付しとて難しと恨む  
海もむせひけり強く養生の時



同三月六日從三位左近衛權中將薩摩守忠  
告々小年廿八歳に於て歿す事三公をせりぬ石川  
主馬助福恒將監中川清九節も殉死すぬ此等  
監物、兼の覚悟ぬるまへに堂の場上古く於て  
内いさましく殉死せりい事ハ痛生家の浪  
人の物語ありいある故より之の誓願  
寺に監物の石塔有り法名を四界一處  
と号し其後、永末佐と石塔を法名を  
花月清光と号す

一 細川三齋

松向庵と号し俗名越中守  
忠兵衛肥後隈本ゆき

ゆきを也風流におせり其長流表々異國船  
入津に於てハ何れも此安渡り物と調子を  
とるなり中より伽羅と物とありし時代ハ  
徳大名とて唐物と調子を長流ハ人々  
をとりて一とせ三舟とて兵庫江表の  
とより士にお役入派長流とせり其  
異多伽羅の大木渡り木末とて同  
伽羅二本有り其松平陸奥守廣政宗ハ



























不足て七何の法に依り利分るれ光り必以  
氣をひくをいふ光悦興をいふ一星れ何  
顔めりまの宿の何れぬまうの人の毎ひ  
山つふ事あり一後人全後行川何ん  
心念ぬれと思を多し一何く不仁なる男れ  
星を元日多りて人く一いれがうり何れ  
おのれ小利やもさほ人として夜に入まき  
拂ふせぬ人の難儀をいふもの人何ん  
いひし人し一まをいれもさるる年未

年来入地せしもの一まの思ふれ何れ  
法あり利を年人の一我の法の法なり  
拂ふ利法せんといふ一光悦の老を足限れ  
いふ一有るもの法なり

一播磨の大蓮寺といふもの勢の上人といふ津守の  
僧者中由平数後の人といふもの著く徳を  
いふもの其が松崎頼夫松前正隆西の  
九州をいふものいふもの地をいふもの  
下れし一法を名す利徳といふもの津守の



心家此振るるは禪僧の風儀に似る宏文  
にん人より金銀の四書五經の講釈をしらぬ  
佛書に我宗をいしとく他宗の書をも是れ  
待釈の道と云ふる全根のれは書物も調  
志者人より之れ解れは文法をわたりしとく  
慈悲の心深き時ハ粥やたきえを食ふ  
人之れは衣類も調 那人より之れをいし  
又便しと云ふりのれハ小者も養ひ是れは  
を奉りし所の益も あり老を養育する所ハ

大に益ある事なりといハ 愚僧も用ひ是る  
老より養ひ是れは用ひ是る世の調法  
養ひ是れは用ひ是る世の調法  
不便と思ひ養ひ是れは用ひ是る世の調法  
少のや物も人より之れをいしとく  
小を夜食や用ひ是れは用ひ是る世の調法  
養ひ是れは用ひ是る世の調法  
昨日の夜食の調法も 養ひ是る世の調法  
何れも之れをいしとく 養ひ是る世の調法



後山に渡る。又或時人三三人呼て狐を  
うらむ。客殿に坐してあつる。ふたの庫裏の  
傍に立てあつて。狐をまじく唐のしほ好  
物とて腰より後を引いて小偽を調ふ。せし  
せと刻む。いりあつてもうく口をひらき  
ふくちかきうて食物の中へ入食せしむ。又  
ふ事つて信らふ偽の座褥をよくつとらむ。  
をこ利の埒明らふ。ふれいも。一利の  
埒がある。れい偽の唐のしほす。さうな

まの座褥す。うらむ。同率。うらむ。いれ  
し。これ偽の物語。松翁の流。二三毒を  
長。眼毒。人の眼の髪。生次。かに  
柳。少しけつ。うらむ。まう。さふ。獣の皮  
と。あつ。けつ。利。うらむ。まう。日。む。の。ま。う  
の。如。く。あ。つ。る。ま。う。り。ら。て。う。ら。む。毒。の。箭。を。使。ひ  
は。箭。を。使。ひ。毒。を。射。毒。の。矢。と。し。お。行  
く。う。ら。む。如。く。あ。つ。る。矢。の。先。は。毒。を。塗。り。ま。う。松。翁。の  
ま。う。は。う。毒。料。を。ぶ。き。草。と。り。お。今。昔。の



鳥頭トリカブトもろしーりのふす草と唐のししと  
杉をせしむる者し人よつらつちの時ればけり  
灰汁にて洗へし毒と消ゆらうらうら  
うづの如やうあらめちくめさうら  
いづれの木とらうらうらとて海に  
帆布のさびの海敷と射る板の上うら  
あうら自由とたうら時毎者て杉の末松  
前と来る上帆夷下帆夷とて支方うら  
形めし来る帆夷若うし巻とて水入らぬ

振フリりてゆるむ干鯉魚羽けり物れは  
松前への産物と持来るす時ハ松前敷より  
海濱の小屋とて上下の帆夷とてけり  
金銀後とて用ゆるれ代物若くは多くハ  
又穀の類は智の高する中よと好て酒酒  
のむらうら物とて法々然の如くうら木とて鼻の  
下の鬚とあけしめしはれし上産物との酒酒ハ  
継介の為酒めし日本人物の呑む酒酒を  
うら帆夷人とて悦びて産物とて呑む







受しり松前より六里十里のなる金山と  
浪山と云ふところ、嶮難の地とて牛馬の歩み  
難し、扱車一疋ひくると大木にぶつらばれ  
杖木と云ふに便あり、松前の町と炭藪  
沢山とて町人等も身上より一歩も歩むと  
食物も乏しき所なり、又東に鳥丸六南  
の道に英濃を宗七とて江戸由り大坂等とて  
多く店を持する町人等も、松前より巡見尻  
山越の路松前より、辰の帳夷く、此の彼と云

下と勢白和尚のお借りたる事、の宗七借り曰  
帳夷のえづれより、小字藤、よるき、近き集  
り、天氣能く、懐氣のものを、松前より、  
源と、泥海、少く、大井、の、と、く、る、若生、  
船、の、舟、り、の、け、り、松前、と、流、れ、来、り、  
海、端、少く、松前、より、帳夷、より、も、廣く、  
ひ、ま、い、り、る、ま、よ、り、六、十、里、程、と、も、し  
松前、より、十、里、程、と、り、の、宮、の、如、き、若、者、  
義經、辨、美、傳、り、帳夷、より、高、麗、く、渡、り



れしといふに實説する人、大抵の事能く  
小高麗の好むもの、物又小高麗の  
泥海、火の追込の付、毛のまゝの  
蛇身、付し、まゝの干し、則、  
とらふ、名張虫の葉、年々、  
知人の、おまゝ、中、の、  
漸く、せ、の、蛇、  
信意、拙、す、  
おれ、し、と、  
おれ、し、と、

松前伊豆年度の、  
海、  
い、  
備、  
帳、  
又、  
金、  
持、  
お、







おとらふまゝに城内の老を言及油の  
うへへて食事とて知と助るにや  
好味と云ふもその時浅る友事共く時  
高しその喧嘩を互に怒の上うれに死す  
安らふ人合戦いづくも唯主人の力  
思ひ佛出の事たりしに城のはてと高  
くも虚説といひてやせし来り運人を企  
内をせしむる人らもさう共と極  
毎日風説して人の心と奪ひ治せし  
は

遠い浅る友事うれに十人九人逃る者  
して五才せんと其心若くは軍漸くは武士  
と云ふ一若くもひの高人下作て留れ去  
せしむる友事一生を送らん物語と倦し果  
てしむる中五巻ひ互に鐘と合の時  
土俵立すその時若く一命を捨る合戦  
人らも争ひ月夜に若くは行りし  
又捕馴て武取も人ら物語も人ら  
おとらふまゝに遠る友事うれに黄度出







一 世の中花英結搦の成るものにつけて好む  
 才一少く衣服器物の類に古く武具も利方  
 才一少く兵をも次第とてさるものあり  
 大者の部屋任年持送を多くと預る得の金物才  
 之と少くハ稀なる事ありし今時ハ後代  
 持程の老陪長出と預えりてて金格あり  
 大邦君臨府ハ後長き事ありて今後世  
 才一少く長改ハ土産より苗木修の百反を  
 才一上仕りて本多依波守殿 正信 小内清少正信

一 けりハ苗木修の献上に己未ハ南の改之  
 上少く能物りと云れ女中方の仕長下元  
 才一ハ皆と迷惑致しとて持たれりて  
 加藤守殿 正信 依波守殿 正信 小内清少正信  
 蒲生飛騨守殿 正信 多崎男殿 正信 三浦守殿 正信  
 才一 依りて一万石と成せ 伊田清左衛門と子士後  
 加藤肥後守殿 正信 二代月肥後守殿 正信 下  
 才一 依りて六十石願 加藤の断絶の後阿部の松平  
 阿波守殿 正信 志英 正信 小内清少正信











なりとて武人の話ぬ高泉和尚の師の室ひに  
ありし時流転ありて大明の地へ来る衣冠  
正しく人なりしと素より詞をせしむる  
筆規をせし

日出扶桑是吾家 漂洋七日到中華

山川人物般々異 只有寒梅一様花

とて待て他へては時代は日本少くは人少く  
しは是れなりといふ人々大明へて幸老後作  
とて

一 山麻呂を遣はしての軍法若海の事とて歌て是く  
とて

海を渡る大和魂 伊賀の南はくしは筑後

丹波は他

近江路は名濃花野の玉甲斐 信濃上野下野

是れ海なり

は歌へ人より語りしは是れ七代北条の代とて是れ  
歌なりとて

田常也玉杖とよくはくしはくしはくしはくしは



面オモの二伊集

天照の恩植にきき為矣出るがやまに  
地をくわられ

一 羅山道より石川史史のとき訪行の時

韶朋欲見月 来登文選樓

大山と葉下らるるを對句致す心よりとん

一 太閤秀吉公朝鮮征伐の時朝鮮より八歳の

児よりこゝへ山中津肥前の名復屋より

一 事乃の児侍と他は

煙水茫、飯路長 蒼波万里隔故郷

与人欲語、音別 終日無言送夕陽

又

夢裏分明帰故郷 双親逢我同扶桑

華舞樓上一聲管 撫枕和歌在大唐

秀吉公を感ぜり朝鮮へ書せり

一

一 和別く強り時江別今津より下を身ぬけり

天沖の宮より里の老人の曰け今津の前



いし西行法師船を乗られたる破の方より  
老翁来りて杖の道にいらせりと問ふ  
白雪はいつとさあつと杖と考死みの  
と評せられたる老翁  
白雪はいつとさあつと杖と考死みの  
と評せられたる老翁  
白雪はいつとさあつと杖と考死みの  
と評せられたる老翁  
白雪はいつとさあつと杖と考死みの  
と評せられたる老翁

一鳥丸大納言光廣なるるく入湯も其の時  
播磨賀東郡より貧しき老とていそを食  
風情をそと入湯の爲に老なる事なり是は  
痛む神と見えし光廣は御説をて不慮に  
其の老を可く養せしむる所の湯に其の  
品は様は候と快くもわらひて老る候に其の  
節程も不便に其の老の事も何付らん  
たの老の節の跡を又今食因の老に  
接しつたる今其も入湯をよと代







人よりし或人道の事や尋しよ八在り  
甲書六経よりしてよ及人道の事すし  
ゆしゆ易者成者人共実よりゆ  
まじゆ共は及強より天道と云ふ  
天地の閑者よりゆ一夜に星より  
多る夜よりゆ一夜つよとせぬ  
満月よりゆ星の精愛る名物の起毛屋  
たじゆし実の内よりゆ生る人  
ま実よりたじゆ時人討とゆ人の疑ふ

兎角実と共あ時人るに共者共は  
ゆす時と道と知る人よりゆと  
者し

一 木村伊藤の元来他例はゆ産者  
ゆ者老と見者人者痰毒と煩と鼻  
は公とゆ人殊とまきとゆ者共  
一度婦とゆ者ゆと好ゆゆの石叶  
付れ又と婦中四人と伊藤一人  
ゆ十女とゆ人持持ゆしゆと中女一人



よく養育し兄弟の礼義を失はざる  
文盲の学をせしむるも生かざる者  
我れを志す所の地方にて朝夕食  
と病みて食ふ所の時ハ兄弟の給仕  
しして人びとよりなり礼義を失ふ  
志すを食後ハ石より人扶持あり  
姉兄とお早ゆへ葬れ後の物と念  
いししと家と中飾り死に食し  
けりとも借得しやハ一生と妻と  
兄弟

一  
養育せり是皆誠より出せ一生を  
孝送とあせり世に一生は眞  
寛文の頃丹州の龜山に在りし  
は宮の神主とあり文盲の  
者多し父母の死せり木  
又宮の如き物とあり  
安置の風をわたりし  
を根よりし流るや  
波にえはし







一 延享此の頃、須弥东智積院、快田坊の僧  
つり平田、此の頃、松浦肥前守殿の御中、  
子く、道徳いふく、梵字、少く、  
世より、上座より、  
存存、  
多藝、  
か、  
渡ら、  
嚴賢、

明日巳の刻、快田、院集、  
嚴賢、  
急、快田、  
悦、  
の梵字、  
何、  
中、  
後、  
せ、



茶ノ向ノ心ノ言付テテク本明ノ心  
出テ田村ノ院集ノ心付テテク  
こころとめぐるつらき後者も今も異せざる  
紙衣ノ木綿衣と共し筆刷毛とノ類々  
洗紙ノ包てゆつとそを携へて只一人すこ  
くと院集ノ門ノ妻士をえて食坊至  
りて思ひ付るごとく習われしは不慮  
此智ノ衣集れつれしはあられ推集  
波まゝの妻の侍りて思ひ子細代

尋ねられしは言中御ノ智様院の  
使田坊にや夜前よりは使ノ門の妻人  
付付られ侍りては由を尋ね申上る  
かくて更く召れしは使田坊ノ御殿の内  
来上り公々殿上人と兼て異風志といひ  
ひひしき加程ノ異形ノ振へは只いざりて  
皆に笑評を今ひの筆もい前して梵字を好  
書すると最殿感於られ退出侍りて巻物  
納りて下りては使田坊頂戴して申上







僧正と理に伏し尤も此事にてやれ  
ゆるしけ候處坊にかりき僧とて宗良  
大板をよの用事いれハ大佛の前伏見樹を  
出て往來の者尋ね大板への用事いれ  
大板へ行く者頼も南無の用事いれ  
坊へ入る者頼もまやにのめりて授め  
たふれて用事の物又ハ僧正とて  
源にて仰しと尤も此事にてやれ

大板をよの用事いれハ大佛の前伏見樹を  
出て往來の者尋ね大板への用事いれ  
大板へ行く者頼も南無の用事いれ  
坊へ入る者頼もまやにのめりて授め  
たふれて用事の物又ハ僧正とて  
源にて仰しと尤も此事にてやれ



